
変態男と優等生

アサト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変態男と優等生

【Nコード】

N8536P

【作者名】

アサト

【あらすじ】

学校でも浮き気味のオタク秋人のもとにやってきた自称『家族』の金髪美少女ミミ。

家族という単語に嫌な思いでも良い思い出も無い秋人はミミの存在に戸惑い時に悩み一緒に暮らしていく。

そんなある時、秋人は投げかける。『お前は誰なんだ？』

「ねえ、起きて秋人」

最初の一声はそれだった。

目の前には見た事もない金髪の女の子が居た。

目覚めの悪い日だからこそ寝ぼけているらしい。

「寝なおすか。」

「ちよっと、布団を黙ってかけなおさないでよ。」

この夢はなんだかうるさい。視聴者の方が居るとしたら気づいても
らえると思うが、夢にしては自己主張が強い。

「うるさいぞ、夢。俺は明日が学校なの。つまり、お前の相手して
る暇無いの。分かるか？」

「分かんないもん。ミミは気づいたらココに居たんだからちよっと
は可愛がれ。ばかぁ。」

夢は自分に名前までつけ始めた。

確かに俺はちよっぴりそういう趣味があるから女の子がメイド服で
ベッドの上に四つんばいで無い胸の下に俺…。

これってエロゲシチュじゃね？

布団から飛び起きる。ついでにミミも飛び跳ねてベッドの下に正座
をする。

「ミミちゃんはどこから来たの？」

興奮が抑えきれない。

「フランスから今さっき帰ってきたの。後、『ちゃん』付けきもい
よ。」

「もしかして君は俺の隠された義理の妹とかそういうの？」

「頭沸いてるんですか？」

この幼女は口が悪いようだ。つまり：アレかツンデレか。

「ツンデレなら話が早いさっさとデレろ。」

「思った事を口に出すな。気持ち悪い。」

「分かった。実は俺が子供のころに約束した許婚とかそういうの？」

「もう黙れよ。変態。手をわきわきさせながらこっち来るな。」

そう思うと可愛いぞ二次元から出てきたとしか思えないようなツルペタなボディも可愛く見えてくる。頭につけた猫耳もGOODだ。

「分かったぞ。俺を喜ばせる為にやってきた宇宙型アンドロイドだな。外は寒かっただろ。さあ早くベッドにお入り。」

「話聞けっの。」

ミミはめんどくさそうに首を振ってボソツと呟いた。『家族だよ。』と…。

その瞬間秋人の時間は止まった。

冬の空は澄んでいた。

「ちょっと待っててね。もう直ぐご飯できるから。」

一階に降りて、リビングに向かうと食欲をそそる匂いがしてくる。どうやら、ミミが料理を作ってくれているらしい。『ありがとう』と声をかけ、新聞をとり、玄関に向かう。

「新聞ならとったから、座って。」

朝の日課の新聞取りまでもやってくれていたらしい。このロリっ子できるぞ。

「お弁当も一緒に作っというたから。一緒に食べようね。 秋人」

さっきからミミに秋人と呼ばれると不思議な気分になる。うーん新種の萌えなのかな。

「なあ、ミミ」

「何、秋人？」

小首を傾げながら、パンをチョコっとかじる姿は最近の属性を追加しすぎて訳が分からなくなった萌えキャラとは違い由緒ある可愛さだ。

「何で当然のように家に居るんだ？それとお前さっき何した？殴った、殴ったよね。」

「だって秋人が強引なんだもん。もっと優しくしてくれないと女の子は駄目なんだからね。」

「あ…うん。」

そうだよな。女の子に強引な事したらエロゲじゃあ B A D E N D 。それなのに俺はただ気絶してぐうぐう睡眠してただけだもん。なんだ、悪いの俺じゃん。

「『あ…うん』じゃねえ。読者の方は間違いなく深い理由想像したぞ。何だよ『その瞬間秋人の時間は止まった。』って厨二病全開だよ。正直恥ずかしいよ。殴られただけだよ。」

とりあえず大声を出してみる。夢にまでみたかもしれないエロゲル
ートだけど、実際なってみると怖いぞ。だって起きたら女の子がベ
ツドの上だぜ。何それ怖い。

かくいうミミは「現実を受け入れられない男って最低」といつてき
やがった。OK受け入れてやろうじゃないですか。

「その服どうしたの？」

「あれ？秋人の通ってる制服と違う？同じもの用意した筈なんだけ
どな。」

無理っす。受け止められません。

「勿論。秋人と一緒のクラスに転入だよ。」

ブイとピースする姿は年相応で可愛い。そういえばミミって何
歳なんだ？

「うーんとりあえず、お前は誰で、俺とはどんな関係でこれからど
うしたいの？それだけでも良いんで教えてください。」

これでもかというくらい頭を下げる。綺麗な垂直を描く俺の身体か
っこ悪いぞ。

「やってて恥ずかしくない？まあ良いわ、教えてあげる。私は『ミ
ーミ・アストレア』で、秋人とは婚約者でこれから結婚して夫婦に
なるの。」

ウインナーをフォークで串刺しにしてパクツと頬張った。多分照れ
隠しなんだろうな。

「宣戦布告なんだからね。」

ミミは恥ずかしそうにうつむいた。

隣には一人の女の子、もう一人ぐしゃぐしゃになりながら泣いている男の子が一人居た。

「君達はだれ？」

そう聞くと女の子は顔を歪めて、でも直ぐに顔を戻して笑った。男の子は少しずつつ落ち着いていた。

「私は秋月詩織^{あきづきしおり}。この隣で泣いているのが源樹。」

「僕は誰？」

「覚えてないの？」

『うん。』と首を立てに振ると詩織ちゃんは悲しそうに笑った。

「葉月秋人。私は秋君って呼んでるよ。樹は秋人って呼んでる。」

「どうして僕は病院に居るの？」

僕は知らない天井に居た。もしかしたら知っている場所なんて無かったのかもしれないけど、ココは病院だった。

白いシート、不自然な程に清潔に掃除された空間。

「秋君は事故にあったんだよ。友達の家で居て、秋君は怪我しちゃったんだよ。だから入院してるの。」

「君の家に居たの？」

「違うよ。私でも樹でも無くてもう一人の友達…だったんだよ。」
「そっか。」

その後、僕たちはたくさん話した。僕たちは友達で、事故の時は一緒に居なかったらしい。

最後にこう尋ねた。『僕に家族は居るのって？』

樹は『ごめん……。』と呟き、詩織は何も言わなかった。

今日の面会時間が終わった。

秋人が10の時の冬。今から6年前のとても寒い冬。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8536p/>

変態男と優等生

2011年1月8日23時50分発行